

沙羅の樹文庫だより

伊豆高原だより、本の紹介 (by 森林浴さん)

文庫あれこれ◆信濃の国食浪漫、赤澤牛焼肉重松川弁当、津軽の笹寿司、深川弁当◆このところ、テレビを見たりして昔を思い出し、気まぐれ夫が急にちょい旅に誘



てくれ1月末に八丈島に行きま。風の強い日で波が逆巻いてした。八丈島には太古の昔、波でたったひとり助かった妊、産んだ男の子との間に子をて島に人々が再び増えてい

たことが。その月が妻伝説がありました。◆一昨日はホテルハワイアンズ(以前の常磐ハワイ)に行ってきました。◆久しぶりに常磐線スーパーひたちに乗って、下を向いてずっとおはなしを憶えていたのですが、ひょいと顔をあげたら、車窓から海が飛び込んできました。勝田あたりだったか。東海(村)を過ぎ、最寄り駅湯本に着くころ、何で夫が今回こんなところを、ということに気づきました。『フラガール』(映画)です。◆炭鉱あとは、駅をはさんで反対側にあるそうですが、今は閑静な街並みでした。彼女たちの

フラダンスに元気をもらいました。◆そう言えば夏ごろから線量計を持参して(夫の赴任地は結構高く)、閑古鳥鳴く福島の温泉めぐりをしました



たっけ。◆昨日くるとき見た伊豆の海、そして八丈、茨城～福島、今更ながら良きにつけに悪きにつけ海に囲まれた日本という風土を思いました。◆再び福島の子を迎えようとしている人々がいます。歌を聴いてもらって罹災した人々を応援しようという人々がいます。この地で♥ ◆私も、何かうまくいかない、どこかが調子



悪いなど不平を言わず、楽しい文庫にしなければ。でもやっぱり、寒い寒い。は～るよ来い、は～やく来い!ですね。(西村)

★引き続き、駐車について、ご協力、お願いいたします♥

湯本駅周辺に設置された銅像? のひとつ(笛ふく男)と。

5月の催しのお知らせ
 ♥アートフェスティバル参加: 11日～20日開館
 テーマでめぐる文庫まるごと展
 文庫の本を面白いテーマ別にならべてお見せします
 ♥若葉のころのおはなし会
 18日夕5:00～ (大きい人向け)
 19日午前10:30～11:45(子ども向け)
 ゲスト: 立川おはなしボランティアの皆さん
 そして、★100かいだてのいえの岩井敏雄さんご夫妻
 ♥本について語りましょう会
 12日(日)午後 3:10～5:30

7月の催し物のお知らせ
 ♥海の日のおはなし会 会場は伊豆高原駅くすのきの下
 7月14日(日)午後5:00～7:30
 ♥文庫開館記念子どものためのおはなし会
 7月15日(月)午前10:30～11:45



八丈島点景(八条富士と八丈小島) 2013.01.27

☆☆今後の開館スケジュール☆☆
 ◆3月は通常 16日(土)、17日(日)
 ◆4月は通常 20日(土)、21日(日)
 ◆5月は変則 11日(土)～20日(月) long
 ◆6月は通常 15日(土)、16日(日)
 ◆7月は変則 13日(土)、14日(日)
 開館記念日が海の日ですので、7月文庫の開館日はそれにあわせず。(第2の土日です)
 ※15日午前は開館記念日おはなし会
 ◆8月は16日(金)～20日(火) long
 ◆9月は通常
 ※文庫の時間: 土曜日は午後2時～5時、
 日曜日は午前10時～午後3時
 ※毎月開館日の日曜には、「子どものための小さなおはなし会」があります。
 午前10:30～11:00

《楽しんで読み聞かせ・頑張っておはなし》
 おはなし・沙羅の勉強会は

連絡先 沙羅の樹文庫 電話: 0557-51-3737

カブとゴボウ・・・・・・・・大久保テイチ子・作
 カブはいつも ゴボウのことを
 スマートでいいな なかよしになりたいなって
 でも、わたしでは とてもむりね、なんて
 おもってしまう
 ゴボウはいつも カブのはだを
 きれいでいいなって なかよしになりたいなって
 だが、このおれじゃ とてもだめだ、なんて
 おもってしまう
 (『しゃべる詩あそぶ詩きこえる詩』より)

カブさん、ゴボウさん、考え込んでばかりいないで、一歩まえに踏み出してみましようよ!

寒いですねえ～。この寒さ、いつまで続くのでしょ。早く若草を踏みながらのどかに散歩したいですね。誰か、春さんの背をそっと押してくれないかしら、わたしたちのほうへ!

2月に文庫に入った大人の本

フィクション:

『何者』(朝井リヨウ著 新潮社 2012) ※request 直木賞受賞。『等伯 上下』(安部龍太郎著 日本経済新聞出版社 2012) ※直木賞。

『a b さ んご』(黒田夏子著 文藝春秋 2012) ※芥川賞。

『獅子渡り鼻』(小野正嗣著 講談社 2012) ※request

『沈黙の人』(小池真理子著 文藝春秋 2012)

『救す人』(大崎善生著 新潮社 2012)

『名作うしろ読み』(斎藤美奈子著 中央公論新社 2013)

『広辞苑の中の掘り出し日本語』『男と女の日本語—広辞苑の中の掘り出し日本語2』(永江朗著 バジリコ 2011)

『仲代達矢は語る日本映画黄金時代』(春日太一著 PHP新書 2013)

文庫:

『もものかんづめ』(さくらももこ著 集英社文庫 2001) ※request

『第一阿房列車』『第二阿房列車』(内田百閒著 新潮文庫 2003)

『国禁』『侵蝕』『継承』(奥祐筆秘帳シリーズ2、3、4)(上田 秀人著 集英社文庫 2001) ※request

『もものかんづめ』(さくらももこ著 集英社文庫 2001) ※request

寄贈本:

『〇に十の字(新潮文庫)』『居眠り磐音江戸双紙 41 散華ノ刻(双葉文庫)』『居眠り磐音江戸双紙 42 木槿ノ賦(双葉文庫)』(佐伯泰英著 2012~13) ※文庫本

『江戸三〇〇年「普通の武士」はこう生きた』(八幡和郎・白井喜法著 KK.ベストセラーズ) ※新書本

『静岡県謎解き散歩』(小和田哲男著 新人物往来社) ※文庫本

上記3冊Oさん、2冊Nさん、お馴染さんから。

『改訂版八丈島の戦史』『消えていく島言葉』(山田平右衛門著 郁朋社) ※共に、八丈島・郷土料理の店「梁山泊」さんから。作者はこちらの父上の由。

2月に文庫に入った子どもの本

絵本:『チョコレート屋のねこ』(スー・ステイントン文 アン・モーティマ絵 中川千尋訳 ほるぷ出版 2013) ★バレンタインにはちょっとおそかったけれど、プレゼントをもらったようなあたたかくなる話。巻末にチョコレートの歴史も。『商人とオウム』

(ミーナ・ジャバアービン文 ブルース・ホワットリー絵 青山南訳 光村教育図書 2012) ★ペルシヤの昔話。ふしぎな考えてしまうお話。『としよ

かんねずみ』(ダニエル・カーク作 わたなべてつた訳 瑞雲舎 2012) ★絵本にねずみはよく似合う? 楽しい工夫が子ども達をよろこばせます。『アナ

ベルとふしぎなけいと』(マック・バーネット文 ジョン・クラッセン絵 なががわちひろ訳 あすなろ書房 2012) ★世の中みんなやさしさを求めているんですね。『ちがうねん』(ジョン・クラッセン作

長谷川義史訳 クレヨンハウス 2012) ★2012年のアメリカのコルデコット賞受賞。『アナベルと〜』の絵

作者の作を、絵本作家の長谷川さんが大阪弁で翻訳。多分標準語で訳すには、ドキッとゾクッと感が強すぎると編集者が考えたのかしら。じっくり眺める子に聞いて見たい、感想を。『さがしています』(アーサー・ピナード作 岡倉禎志写真 童心社 2012) ★

原爆の不条理をものに語らせた写真絵本。アメリカ人の作者の声。前の本とこれ、親子でよんでみてください。大人にもおすすめ。

読み物:『ワシのゴルゴニルスが出会った物語 5』(セルマ・ラーゲルレーヴ原作 菱木晃子訳・構成 平沢朋子画 福音館書店 2013) ★『ニルスのふし

ぎな旅』を少しやさしくして絵をたくさん入れたシリーズ。1からあります。中学年のみんなに読んでもらいたい本です。『じゃんけんのすきな女の子』(松

岡享子さく 大社玲子え 学研 2012) ★読んでもらうなら3歳くらいから、自分で読むなら1年生くらいから。40年前でた同作者の『なぞなぞのすきな女の子』は今40代の娘3人が好きでした。

『きみに出会うとき』(レベッカ・ステッド著 ないとうふみこ訳 東京創元社 2011) ★一番優れた読み物に与えられるニューベリー賞受賞。以前、アメリカ

の娘が推薦紹介。『金色の髪のお姫さま』(カレル・Y・エルベン文 アルトゥシ・シャイベル絵 岩波書店 2012) ★チェコの昔話集。絵がすごいです。

この本、おすすめよ!

『ものすごくおおきなプリンとうえで』

を、読んで

稲取小学校2年 稲岡郁音

プリンやホットケーキの上で、みんながなわとびをするなんて、とっても楽しそうです。

わたしが一ばんおもしろかったところは、アイスがとけてみんながしずんでいく場めん。だって、なわとびをやりながらアイスの中にしずんでいくなんで、なわとびがとってもきれいな色になりそうなんだもん。

わたしは、アイスがとけたら水えい大会をしたいです。アイスプールでは、およぐのがじょうずな子でも、うまくおよげないかもしれません。それに水えいがあまりとくいじゃないわたしでも、じょうずにおよげるかもしれません。こういうところが、この水えい大会の楽しそうところなんです。

本とうに、わたしは、1回でいいから、アイスプールに入ってみたいです。とびこみ台もほしいです。ジャンプしてもうかんだままかもしれないなんて、とっても楽しそうです。ゴーグルをしても前が見えないかもしれません。前が見えないから、だれかとだれかがぶつかったり、プールのはしに、ゴッチーンと頭をぶつけてしまうのも、いたそうだけどおもしろそうです。

おもちの上でなわとびをすると、どうなるだろうか。とかんがえるとワクワクします。おもちがぶにゃんぶにゃんと、くつにくっついてしまうかもしれません。トランポリンみたいにたかくジャンプできると、二じゅうとびがすごくかんたんにできるかな。百じゅうとびくらいできたらうれしいです。下にしずんだ時も楽しそうです。

おもちだけでなく、ガムやチョコレートの上でなわとびをしてみたいな。この本を読んで、いろいろなことにそうぞうが広がりました。自分で考えることがすごく楽しくなりました。これから、もっといろいろなことを考えていきたいです。

伊豆高原便り

新年になって、伊東国際交流協会主催の「沖仁コンサート」に行きました。ひぐらし会館は満員でした。沖仁さんは、伊東育ち（小学校は池、中学校は対島）です。大室高原にある「アリスのレストラン」の出身。ここを経営するご両親は大学の先輩。子どもたちを自然の中で育てたいと伊東に越してきたとか聞いています。沖仁さんはNHKの「風林火山」でギターを弾いたのを聞いて知りました。小さな「アリスのレストラン」でのライブも聞きました。最近NHKBSの「旅のちから」という番組にも出ていました。インターネットのUTUBEで即興演奏を聴くことができます。最近お家が立て替えられて、ペンションは辞めたとか。「アコースティックホール」という看板が出ているのが気になっています。何か催しができるのでしょうか。お知らせを待っています。フラメンコギターは素晴らしかったです。奏法の解説や、飛び入りのダンスもあって楽しめました。

コンサートの前に、いつも麻雀の時に弁当をとる「キッチン小屋」でみんなでランチを食べました。ここをやっているのは、元幼稚園の園長さん。（ご主人は森のボランティアに参加）定年後、何か人の役に立ちたいと、大好きな料理の腕をいかして「小屋」をつくりました。福島の子どもたちが来たときにはごちそうを出し、子どもたちに料理教室を開いたりしているとか。この日のメニューは、イカそうめん、サラダ、根菜のグラタン、ブリ大根などなど。肩の凝らない家庭料理がお得意です。場所がちょっとわかりにくい所なのが難点ですが、続いてほしいお店です。
(2013年1月) 中西景子

会員からの伝言板

震災復興

「歌の花束」チャリティーコンサート

花の便りが届く頃となりましたが、大震災後2年がたとうとする今、まだまだ辛い日々を送るたくさんの方が居られることを思うとき、この伊豆の地から少しでもお役に立つことができたらと、「共に助け合い、心をついに！！」のテーマのもと、**第2回チャリティーコンサート**を開きます。

出演は「コールやまゆり」「アンサンブルあざれあ」のメンバーです。皆様の心に届く歌を！！と練習に励んでいます。

前回と同じくご来場の皆様との共演も予定しています。NHK復興支援ソング「花は咲く」を含め、皆様よくご存知の曲をご一緒に歌いましょう。

どうぞ、4月17日は、あなたの心の中にも花を咲かせにお出かけください。 柳川由美子



月 2013年4月17日(水)

pm2:00 ~ 4:00

月 ホテル アンビエント伊豆高原ロビー

月 入場無料(義援金を募ります)



福島の子どもたちの<心とからだの回復>を願って

福島の子供たちを

今回も、**春休み保養ステイを実施**します。ご協力をお願いしています。

保養活動は子どもの命に関わる大切な活動

「フクシマ」の子どもたちを、たとえ一週間でも放射能の恐怖から開放してやるのが、体力の回復、免疫力の向上、そして何よりも明るさと元気を取り戻す大きなきっかけとなります。……(略)

日時 3月24日～29日

保養施設 林間劇場ナチュラルー

主催 『子供たちを放射能から守る伊豆の会』

連絡先: 安部川てつ子

伊東市大室高原2-554

0557-51-1335 (T&F)

資金カンパ

物資支援

★沙羅の樹文庫も応援します。

参加してくださる方、用紙が文庫にありますので、スタッフに、どうぞお声をかけてください。

また、参加した福島の子どもたちのおかあさんからのお手紙(コピー)もありますので、関心のある方はお読みください。

2013年1月に読んだ本についての感想

2013年1月14日

By 森林浴

『この国はどこで間違えたのか—沖縄と福島から見た日本』 徳間書店出版局編 徳間書店刊 2012年11月第1刷

2011年12月から2012年7月にわたって沖縄タイムス誌に連載された沖縄タイムス社の論説委員渡辺豪による今まさに「旬」の8人の論客に対するインタビュー。彼には、「原発を問うなら沖縄の基地も問え」との思いがあった。(沖縄の本土復帰1972年、福島第1原発運転開始1971年。)なるほどこの二つは一緒に考えた方がよさそうだ。私は、この中で個人的には、内田樹と開沼博に特に注目した。

内田樹—どこまでも属国根性。政治家も官僚もマスメディアも「日米機軸」を唱えるばかりで、「国家主権の放棄」を継続したまま思考停止に陥っている—、**小熊英二**—ムラの瓦解は早い。「原子力村」も「安保マフィア」も自ずと瓦解してゆく—、**開沼博**—物語の中に答えはない。原発も基地も推進派がある、彼らの論理を凝視せよ—、**佐藤栄佐久**—自治踏みにじる原発—、**佐野真**—神話にすぎる日本人—、**清水修二**—カネの切れ目は好機—、**広井良典**—「なつかしい」未来を求めて。新たな価値観のキーワードは「コミュニティ」と「自然」—、**辺見庸**—徹底的な破滅から光。この国は完全に滅亡し崩壊しないと駄目だ—という思い—。

百年文庫7 『闇』

コンラッド「進歩の前進基地」先月の感想文で触れた、渡辺京二が読みたかったというJ.コンラッドの作品があったので読んでみた。コンラッドはポーランド人だが28歳で英国に帰化し船員となった後、作家になった。アフリカのコンゴらしい密林の奥の川沿いの交易所(まあ現地人相手の商店ですかね。周りは恐ろしいような濃い密林で交通は川を舟で行くしかない、一番近い文明までは約500キロ、本部の舟は半年に1回しか来ない、孤絶した拠点。)に派属された落ちぶれた白人男2人。やがて事件があり、現地人による食料

供給も途絶え、熱帯病に冒され、最期には狂気にまといつかれた二人は殺し合いと自殺で自滅する。グレアム・グリーンのアフリカ物にも似た話があったが、鋭い記述、密度の濃い名短編だ。

大岡昇平「暗号手」先の戦争でフィリッピンのマンドロ島に駐屯していた著者の体験談。インテリ兵士の大岡は派遣軍の部隊の信号手(今は見かけない電信—トントン—と信号機で通信する。すべて暗号で。)になった。大岡がもう一人信号手が要るとして大学出の兵士を選ぶが、その男は大岡の「軍隊では株をあげるな」という忠告を無視して、上官に媚びて出世し、そのために米軍が攻め込んできて撤退するときに過労でマラリアにかかり病死する。軍隊内のいびつな人間関係を大岡らしい醒めた目でくっきりと記録している。

フロベール「聖ジュリアン伝」作者の晩年の作品。これはちょっと私には消化できそうもない小説。小説というよりキリスト教の伝説・説話といったらよいか。西洋の古い教会の大きなタペストリーを見ているような気分。

『新忘れられた日本人 昭和の人 IV』 佐野 真—著 毎日新聞社刊 2012年7月

「サンデー毎日」に2011年6月から2012年6月まで50回にわたって連載された記事に出てくる下記の人物の物語。登場人物は、

山岸章(連合会長)、海老沢勝二(NHK会長)、渡辺美智雄、千昌夫、古沢岩美(画家)、孫三憲(孫正義の父)、山下文男、今村昌平、嵐寛寿郎、荒戸源次郎、正力松太郎、氏家斉一郎、渡辺恒雄、堤清二、網野善彦(歴史家)、沢村栄治(大投手)、野口務、渡辺泰子(東電OL)、北杜夫、柴田秀利など、いずれも癖のある強烈な個性で「世にはばかった」面々。後半の正力松太郎、氏家斉一郎、渡辺恒雄、野口務、柴田秀利**は読売新聞グループ。正力・氏家・渡辺恒(ナベサダ)と読売グループには何故か私の強い大ボスが続けている。朝日新聞の悪口もあるし、だからこれはサンデー毎日にしか書けなかったのだな、と思った。**

2013年2月に読んだ本についての感想

2013年2月21日

By 森林浴

『われらが背きし者』ジョン・ル・カレ著 上野伸雄・上杉隼人訳 岩波書店刊 2012年11月第1刷

著者ジョン・ル・カレはスパイ小説で著名な英国の作家。原題は「Our kind of traitor」、kind ofというところが一癖ある表現で、われわれ皆が裏切り者みたいな者であって—という意味か。

500ページを越す長編だが、カリブ海の英領アンティグア島からロンドン、パリ、スイスのベルンやアルプスの有名観光地と次々に舞台を変え、ロシアの恐ろしい犯罪組織と英国の諜報機関が対峙して、気を抜く暇もないストーリー。またテニスが重要な舞台になる、アンティグアのテニスコートから全仏オープンテニスの決勝戦、そしてパリの高級テニス倶楽部のコートでの雨中の対戦など。舞台回しはオックスフォード大学の「教授」と呼ばれている男とその恋人の美人弁護士だが、やがて英国諜報部のいろんなメンバーが主役となり、その一筋縄ではゆかない込み入った人間関係とピリッとわさびの利いた会話が面白い。(実は可愛い子供達が隠れた主役かもしれないが。)

最期の最期はちょっとあつけない!

『樋口一葉考』 中村稔著 青土社刊 2012年11月第1版

中村稔は詩人弁護士として知られた人。

この本では樋口一葉に関する多数の評論(関良一・前田愛・峯村至津子・菅聡子・和田芳恵・鈴木淳などの)を片端から批判的にコメントしている。

著者は一葉の作品を精密に読み込んでおり、読み間違いと思われる記述は許せないという強い情念が感じられる。弁護士らしくというべきか、ちょうど裁判所で相手側などの論理矛盾を緻密に追及する弁護士みたいな気迫だ。

